
Keep Smiling

片桐 彩華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Keep Smiling

【Nコード】

N3213C

【作者名】

片桐 彩華

【あらすじ】

常に笑う少女。笑いたくなくても笑い、いつしか本当の笑顔をなくしていた。そんな少女に母から後半年の命という宣告。少女は笑うことをやめた。日に日に弱っていく少女。そのまま死んでいくのか？それとも…？

最後まで、笑えたなら

そんな幸せなことはない

- K e e p S m i l i n g -

思えば私はどんな時でも笑っていた気がする。

悲しくても、怒っていても、気分が落ち込んでいる時も。

それは良いことだと、思ってた。

周りに不快感を与えず、笑うことで自身の気分も上がったたりしてさ。

『辛いときこそ笑え』

祖母が残した言葉。

大好きだったおばあちゃんのその言葉を守り、信じてた。

でもね

今、私笑えてない。

母から告げられた残酷な事実。
私、死ぬんだって。

病気が手遅れで、よくて半年とか。

何のドラマだよ、それ。

軽く現実逃避しちゃったよ。

きつと、私はいつも笑顔でいる『明るくていい子』だからこの事実を知っても『私』でいてくれると思っただよね。

ごめん、無理。

私は強い子でもなんでもないんだから。

ねえ、おばあちゃん。

辛いよ。

笑えないよ。

泣くことも出来ない。

それはとても惨めで醜い気がするんだ。

月日が経つのは早いものです。

病室の白いベッドはもうすっかり自分の物のように感じています。

母は毎日この個室を訪れます。

そして、日に日に細くなっていく私の腕を見ては部屋の外で泣いているのを、私は知っています。

3ヶ月、私はただただ生にしがみつき、死を怖れています。

灰色の空からは真つ白な雪が静かに降り続けています。今はまだ積もってはいないようですが、やがて足跡を残せるくらいになるでしょう。

私は、笑っていません。

今日は、少し調子がいい。

久しぶりに窓を開けてみた。

肌を刺すような外気に触れて、ああ、生きてるなんて思っちゃった
り。

そうして、ちよつと体が冷えてきた頃、友達が部屋を訪れた。

これもまた久しぶり。

私を見て驚いたような、哀れむような表情を一瞬でもした貴方。

うん、当然の反応だね。貴方が知ってる『私』はもういないから。

だけど、同情とか止めて。

無理して笑ったりとか、見てるこっちが痛い。

痛い、痛い、イタイ。

私は、まだ笑えない。

あれから5ヶ月になった。

最近では体を動かすのにも苦痛が伴い、ベッドから起き出すこともない。

鼻にも腕にも管を通された私の姿は、正に病人そのもので、
瞼を閉じれば、寝ているのか死んでいるのか一見わからないかもしれない。

自分が死に向かっているのがわかる。
もう、物を考えるのもだるい。

私は、やっぱり笑えない。

もうダメだろうな。

他人事のように思った。現実には酷く私の体と心を蝕むから、もう眠ったままでいたかった。

そしたら、ね。

お節介な奴がいて、私を外に連れて行つた。

声も出せない私を、連れ出したソイツは、前に来た友達。

担当医もあつさり許可したりして。

あれか、最後だから好きにしるってことか。

拒否することも出来ず、なすがまま車椅子に座らされて、病院の自動ドアを抜けた。

薄手のカーディガンを羽織った私は、頬に暖かな風を感じた。

ああ、今は春だったね。

心地よさは感じたが、目を開けようとはしない。見たくない。受け入れたくない。

私は消えていくのに、これからをいくモノを見たくなんかない。だって、辛くなるだけだから。

暫くして、ソイツは歩みを止めた。
必然的に、私も止まる。

目を、開けてと言われたけど、嫌だと行動で示した。

目を、開けて。

また言われた。

しつこい。嫌だって言ってるの。

ね、見てごらんよ。

あんまりしつこいので、観念して目を開けた。

ずっと閉じていたから、眩しさに目が眩んだ。

そして、視界に入ってきたのは水色を背にした桃色。そこから地面に向かってひらひらと、小さな桃色が落ちていく。

桜だ。

もう、咲いているのか。

ただぼーっと見ていた私に向かってソイツは笑いながら言った。

『綺麗つしょ？』

あの時とは違う、繕ったような笑いではなく、心からの笑顔。

あれ？

なんだろう？

なんか、目が熱い。

鼻の奥がつーんとする。

頬を伝う感触。

生暖かい、それ。

不鮮明な視界に滲む水色と桃色。気づけば、私は唇を動かしていた。

『きれい』

音は発していない。

けれど、ソイツは私が言ったことがわかったらしい。
でしょ、と相槌を打つと急に泣き出した。

おいおい、なんでそこで泣くかな。
こういう時は笑うもんでしょーが。

ま、不快ではない。
不思議なもんで。

泣くという行為は不快感を与えるもんだと思っていたけど、そうでもないんだね。
気づくの遅すぎだけど、気づかずにいくよりはいい。ほら、もう泣かないで。必死に腕を動かして、私はソイツの手に自分の手を重ねた。

泣きながら、私を見たソイツに私は笑った。
そしたら、ソイツも笑った。

口の動きだけで『ありがとっ』なんて言ったら、また泣き出した。

だから泣くなっतेの。
笑ってよ。

私も笑うから。

あの桜に、涙は似合わないよ。

現実もそう悪いもんじゃないね。

目を閉じていたらわからなかったことが、わかった。

それは死に逝く私に優しく微笑んでくれた。

だから、もう怖くない。

生まれ変わりがあんなら、桜になりたい。

美しく、儚く、愛おしい存在。

すぐに散ってしまうけど、そこには何の後悔も苦しみもなく

ただ、微笑んで。

ただ、そこに在って。

吊られて、こっちまで微笑んでしまっ、そんな存在に。

笑っただけじゃない。

泣っただけじゃない。

怒っただけじゃない。

アナタは繕ったりしないから、素敵です。

私、笑ってるよ。

初めて泣いて、初めて心から笑えたの。

幸せ？

うん、幸せです。

e
n
d

（後書き）

初投稿、突発文です！
でいただき感謝です！

至らない点多々あると思いますが、読ん

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3213c/>

Keep Smiling

2011年8月6日00時20分発行